
…冬物語…

かなん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

…冬物語…

【Nコード】

N0772B

【作者名】

かなん

【あらすじ】

抽選でたまたまスキー旅行を当てた和葉。平次、蘭、新一を誘って旅行に行った矢先、新一の知り合いが現れて…平次と和葉のすれ違い物語。

01. 冬景色

雪が舞い降りてく

白い

白い雪が

この街を

銀世界に

かえてゆく…

02. 宿泊券

じゃらじゃらじゃら…

ぽと

カンカンカン

「おめでと〜ございませ〜す!〜!」

いきなり鐘ならされてびっくりしたんや。

まさか…

平次んとこのおばちゃんに頼まれた買い物のレジでもらったガラガラ（？）で…

「03泊04日で行く北海道アルファリゾートマムザ・タワー
宿泊券」

こんなんが当たるなんて…

帰り、平次ん家へ歩きながら、あたしはずーっとその当たった宿泊券を眺めてた。

「誰と行けっちゅうねん…」

ぱっと浮かんだ幼なじみの顔。

「何であいつと行かなあかんねん!!」

顔が赤くなった。

周りから変な人に思われそうなほど首を横に振りまくった。

ふと、裏のちっさい字イが目についた。

「この券一枚で四名様まで使用可」

四人かああ…

蘭ちゃんと工藤くん誘ったら丁度四人…

そしたら平次と行っても怪しくないねんな…

あたしは平次が好き。

平次は全然気付いとらんけど、平次にはその気がないだろうけど…

あたしは平次と行きたいんや…

なんて、恥ずかしゅうて本人にはこんな事言えへんけどな。

「アホか」

で返されるんがオチやねん…

目に見えてるわ…

そんな事を考えながら平次の家に着いた。

02. 宿泊券（後書き）

頭痛くなってきた…

03. 手料理（前書き）

大阪弁むつかしい…所々日本語おかしいですが、あまり気にしないでください…

かなん

03. 手料理

がらっ

「おばちゃん！！買い物してきたで」

平次んちの玄関を勝手に開け、大声でおばちゃんを呼ぶ。

「おおきにな、和葉ちゃん」

パタパタと駆け足でやってくる、平次のお母ちゃん。

すらーっとした綺麗な人。

「堪忍なあ。平次のやつ、買い物して帰ってこいゆうたのに、また事件やーって一度も家帰らんと行きおって…」

「大丈夫やで、いつもの事やし。それに今日はお父ちゃん家に帰ってこんから、平次んちで夕食ご馳走になろー思って」

「ホンマに？ほな、あがって」

はたから見ると、なかなか図々しい会話。
でもこれいつもの事やねん。

お父ちゃんは警察、お母ちゃんは小さい頃からおらん。

せやからお父ちゃんが帰ってこおへん日は、いつも平次ん家でご馳走になるんよ。

お婆ちゃんが決めた事なんやけど…

…にしても、買い物ほっぽって事件にほいほい行く平次は、絶対アホや。

…そりゃあ、事件解決したあとの平次、めっちゃキラキラしててか
つこいいんやけど…

…ちやうちやう。

今はそんな事関係あらへん。

帰って来たら、買い物代わりに行った事攻めたる。

んで…

旅行券の事、話さなあかなあ。

脅すか？

そんな事考えながら、あたしはおばちゃんの夕食の手伝いをした。

こうみえても、料理はめっちゃ得意やねん。

おばちゃんのテッチリの足もとにも及ばんけどな。

只今の時刻、19時24分。

平次遅い！！

はよ帰ってこんかい！！

04. バイク

がら

「おかんゝ帰ったで」

やっと帰ってきた推理ヲタク、平次。

「帰ったでやないやろ」

「すまんすまん。お、なーんや和葉、おったんか」

ぷち…

「な〜にが『おったんか』や!!! 今日の夕食の買い物、平次の代わりにあたしが行ったんやで!!! すこしは感謝しいや!!!」

「そうやで、平次」

「しゃくないやろ…事件あったんやから、ほっとけるわけないやん」

あゝのゝねゝ…

「よくゆうわ。自分んちの買い物はほっぽるくせに…おばちゃん、平次飯いらんて!!」

「んな事言つとらんわい!!」

また喧嘩。

いつものことやねんけど。

好きでしてゐるわけやない。
自然と、売り言葉に買い言葉。

一言…一言いえたらええのに…

平次好きや、て…

あたしはホンマ素直になれへんなあ…

蘭ちゃんみたいに素直やったら、あの二人みたいに恋人になれるの
に…

ただ一言なのに…

「はー食った食った」

平次がお腹叩きながら横になった。

「和葉ちゃん、今日はホンマありがとなあ。ほら、平次。和葉ちゃん送ってって行き」

「なんで俺やねん…」

別に嫌ならええねん。
一人で帰るわ！！

ごん！！

あたしの頭に鈍い音がした。

「いったあ…」

「はよ、行くで」

左手に平次のヘルメット。右手にあたしのヘルメット…

なんだかんだ言って、平次は優しい…

それは幼なじみとして？

それとも…

期待を胸に、早々と平次のバイクの後ろに乗った。

「なあ平次、あたしな…今日福引きで宿泊券当てたねん」

「へ…どこ？」

「『北海道アルファリゾートマム ザ・タワー』って言うところやねん。三泊四日で…」

「北海道か…ええなあ。で、誰と行くん？」

「蘭ちゃん誘お思ってるんやけど…工藤君付いてきそうやし、なんやあたし気まずいやん。せやから…平次一緒に行かん…？」

…言った！！

「確かに、工藤の事やからな…よっしゃ。俺も行くわ」

「ホンマに？」

「おん。日にちと向こうに着いてからの事は、お前に任せるわ」

「わかったあ」

そんな話をしてる間に、もうあたしんちまで着いてしもうた。

「ほな、またな」

「うん、なんか決まった連絡するわ」

「ん」

平次は、あたしが家の中入るまで家の前にいる。

やから平次のバイクを見届けた事わないねん。

お父ちゃんが家にいない事心配してるんやろうけど…

平次は優しいねん…

04. バイク（後書き）

ふ…ッ

大阪弁わけわからん。わら

05. 予定話

「ホント？行きたい行きたい！！」

家に帰ってから早速蘭ちゃんに電話して、宿泊券について話たんや。

蘭ちゃんは大賛成らしくて。

「今、新一に聞いてみるね！！」

蘭ちゃんは今、工藤君ちにいるみたい。

電話の向こうで会話が聞こえる。

「もしもし。新一も行きたいって」

「ホンマに？やったなあ」

「ホントは、服部君と行けて嬉しいんでしょ？笑」

「な、何ゆうてんっ！！」

「わかるよ。和葉ちゃんの事なら」

凶星や…

蘭ちゃんにはかなわへん。汗

「…半分あたりや。平次と行きたいねんけど、なぐんか意識してしもうて…あ、でもホンマに蘭ちゃんと行きたいんやでっ」

「うん、わかってるよ和葉ちゃん。じゃあ、日にちどうする？あたしたち学校明後日から冬休みなの」

「ホンマに？こっちも同じやねん。ほな、たよつと氣イ早いけど、

明後日からにせえへん？」

「いいよお。じゃあ新一にも行っとくね」

「ほな、よろしく頼むわ!!」

そのあとも延々と話して、あたしらは大阪から、蘭ちゃんは羽田から飛行機に乗る事になってん。

なんや…めっちゃうきうきしてきたわあ…

あ、平次にメールせな…

『スキー旅行、明後日からに決定。蘭ちゃんと工藤君は羽田から飛行機に乗るって。新千歳空港に一時までに合流予定やから』

『了解』

…そんだけかい!!

まあ…ええわ。

楽しみなんやからっ

何着てくか、はよ決めんと☆

05. 予定話（後書き）

東京と大阪…

会話ってむつかしいです汗

ちなみに、行き先とかは

ネットで調べますッ

かなん

06. 出発日

学校、終業式。

今年は22日から冬休みやねん。

毎年より、早い冬休み。

ちゅー事は、クリスマス、イブと、蘭ちゃんたちと北海道で過ごすことになるんや。

もちろん…平次と…

平次には毎年クリスマスプレゼントあげてるんねん。

…平次からは小さい頃にもらったきりなんやけど…

今年こそくれるんじゃないかと期待して。

二学期最後の学校を後にした。

みんなと遊んでプリクラなんか撮って、今日はお父ちゃんが帰ってくるから、六時前にみんなと別れた。

家に帰って夕飯作って…

片付けが終わってから明日からの仕度…

あれ、ウェア何処しまったんやっけ？

用具は向こうで借りれるからええとして…

マフラーに手袋、ぼうし…

明日の服と明後日と…その次はどないしょ？

あゝ修学旅行みたいやんツ

全然決まらへん…涙

なんやかんやであまり寝れなかったんや…

次の日。

平次が迎えに来た。

頼んだ訳やないのに、何故か毎回遠出する時は、平次があたしん家まで迎えに来る。

「和葉アゝはよせんかい」

「今行く」

戸締まりOK。

火の元OK。

暖房消しOK。

「お母ちゃん、いってきます」

お仏壇にお線香あげて、荷物を持って出ていく。

「はよせな、飛行機乗れんど〜」

「わかってるわ!!」

予定通りの飛行機に乗り、北海道へ向かった。

06. 出発日（後書き）

いよいよ出発です…
遅くなりました汗

かなん

07. 御一行

「うわあゝッ見てえな、めっちゃ雪積もつとるよ!！」

横に座ってる寝起きの平次の服をひっぱり、飛行機から見える景色を見せようとする。

「雪ぐらいで…騒がしいやつやなあ…」

平次は興味なさそうな声で、それでも外を見る。

「平次も素直やないなあ…」

聞こえないように小声で呟く。

平次はよく事件で雪ん中とか行くけど、あたしはあんまりないねん。

やから…楽しみやってん。

綺麗やし…

神秘的やん…

飛行機からおりて、手荷物受け取り口から出た。

今は…01時02分前。

もうちょいやなああ…

そう思ってロビーに座っていると…

「和葉ちゃん、服部くん」

蘭ちゃんの声が聞こえた。

「久しぶりやなあ〜工藤君も!!」

「久しぶり」

「工藤〜俺には〜?」

「よう」

「相変わらずそっけないやつやな〜」

久しぶりのメンバー。

久しぶりの空気。

なんか、居心地が良いねん。

「じゃあ、送迎バス待たせてるし、そろそろ行こうか？」

…工藤君たらいつの間に…

送迎バス用意してるなんて…

やっぱり気が利く人やな。

ロビーを出て、「遠山様御一行」と書かれた、四人乗るには丁度いいバスに乗った。

なんであたしの名字やねん…

なんか恥ずかしいわ。汗

08. 富良野

バスの後ろは四人乗りになっとして、前にあたしと蘭ちゃん、後ろに平次と工藤君が座った。

「北海道なんて何年ぶりだろう…あたしすごい楽しみ♪」

「あたしもやあゝあたし雪めっちゃ好き!!」

「東京も大阪も雪降らないもんね…降っても二日くらいしか積もらないし」

「ホンマやあ…いっぱい遊ばなあかな!!」

「そうだねッ」

こちらはそんな話をしとった。

後ろの二人と言えば：

かすかに聞こえる会話は、この前起きた難事件やら今月は何件解決したか：声の感じだと、今月は平次が勝ったみたいや。

そんな話して楽しいんやろうか：？

「チェックインまでかなり時間ありますから、何処か寄りますか？」

「ホンマですか？」

運転手さんが何処か連れてってくれるみたいや。

「蘭ちゃん、行きたいところある？」

「じゃあ：富良野行きたいなあ：」

「富良野ですと遠回りですし、丁度いいかもしれませんね。」

「そうですか、冬だからラベンダー畑とか美瑛とかつまんなそうだし…」

「では、オルゴール館はどうですか？」

「「オルゴール館？」」

あたしと蘭ちゃんの声が揃った。

「はい。結構人気あるんですよ。」

「オルゴールかあ…行きたいねッ」

「そやな!! ほな、オルゴール館まで頼みますッ」

「わかりました」

いきなり進路が変わって後ろの二人はびっくりしたみたいやけど、推理ヲタクなんて無視無視!!

あたしらは期待に胸を踊らせながら、歌を歌い始めた。

「着きましたよ」

あたしらはいつの間にか寝てしまったみたいで、運転手さんの声で起きた。

「さむーいッ」

一歩外に出ると、辺りは雪、雪、雪。

「和葉ちゃん、早く行…きゃあ!!」

車から降りた瞬間、足下の氷で蘭ちゃんは足を滑らし、転びそうになった。

くそうになったって事は、もちろん転ばなかったんや。

もちろん、助けたのは…蘭ちゃんの彼氏サン。

「はしゃいでつと、こけて尻打つぞ?」

「し、新一…」

やっぱかっこえくな、工藤君は。

さりげなく、横目で平次を見てしまう。

「…なんやねん。その目は」

「なんもあらへんよ」

そういいながら、蘭ちゃんの手をひいて、オルゴール館の中へ入った。

08. 富良野（後書き）

記憶を辿りに：

ちなみに旭川じゃなくて
千歳にしたのは
地図上に「平和」と
書いてあったからですW

かなん

09. 女の子

オルゴール館のドアを開けた瞬間、違う世界に來た気がした。

暗い部屋。

でもオルゴールのライトで幻想的な雰囲気の流れてる。

あたしと蘭ちゃんは思わず足を止めた。

すい。

綺麗…

部屋の中は結構広くて、辺り一面オルゴールと淡い光。

ホンマに、違う異次元へ来てしまったみたいや…

お客さんは多すぎず、少なすぎず…

「あ…」

あたしは一人の女の子に目がくぎづけになってしまった。

あのこ、なんでこないにこの部屋が似合うんやろ…

髪の毛は蘭ちゃんと同じくらいの長さで、色は透き通るような茶色。目は濃い青で、オルゴールの光のせいか、キラキラと光っている。顔立ちは…ハーフだろうか。綺麗な顔…

まるで、この世界の住人のようやった。

彼女はあたしの視線に気付いたらみたいで、目を見開いてこっちを見つめておる。

ふと、彼女の目の輝きが変わった。

「新一君？」

視線の先は工藤君。

「笑夏ちゃん？君がどうしてここに…？」

…知り合いなん？

一番不思議そうにしてるのは、蘭ちゃんやねんけど…

「お姉ちゃんと旅行にきたの。二泊四日で。新一君こそ、どうして？」

「俺たちもだよ。あのこが宿泊券当ててね…」

工藤君はあたしの方を見た。

なんでもええから、蘭ちゃん機嫌悪いで…汗

「新一、その人は？」

満面の笑顔で工藤君に聞く蘭ちゃん。

…目エすわつとるよ…

「この人は、前に伊豆の事件を解決したときに、泊まってたコテージの娘さんだよ」

「そうなんだ…」

あ、蘭ちゃん。
今ほっとしたでしょ。

「紹介するよ。こいつが毛利蘭。隣のこが遠山和葉ちゃん。で、一番奥の肌と部屋が一体になってよく見えないやつが、服部平次」

「工藤〜!!」

工藤君おもしろいなあ〜

ホンマやでッ

「服部…平次……?」

女の子がまじまじと平次を見てる。

「服部平次、西の高校生探偵や」

「ほんとに?! あたしの事覚えてる?..?」

…え。

「覚えてるものにも、初対面やん…」

「初対面じゃないよ!! 小学生の時、一回だけ一緒に遊んだ事あるじゃない♪」

…ええ。

「そうなんか? よう覚えとるなあ」

「当たり前じゃないですか!! あたしの初恋の人なんだからッ」

え…？

今なんて…？

初恋…？

嵐が起こる予感がした…

09. 女の子（後書き）

ああ…

話がこんがらってきたぞ…

かなん

10. 苛立ち

「服部が…」

「初恋の人…?!」

………

あたしは声も出なかった。

え…?

何…?

この子の初恋の人が平次？

なんで初恋やねん。

てか、なんで平次と会ってるねん。

小さい頃はいつもあたしと一緒にあったんやで？

あたしの知らないところで会ってたんか？

なんで平次はあたしに言わないねん。

んで、あの目のキラキラは何や。

まさか…

まだ平次の事…？

思考回路がぐるぐると回つとる。

ものすごい不安が襲う。

笑夏と名乗る少女は、いそいそと平次の元へ駆け寄って、腕をくんだ。

「折角また会う事が出来たんだから、どこかお食事に行きませんか？」

「…食事？　そういうえば小腹がすいたんや」

「なら丁度いいわ☆」

平次の腕をひっぱる彼女。

「あ、そろそろチェックインの時間だし、夕飯は五時にしてあるから、行かなきゃ…」

蘭ちゃんは時計を見ながらちょっと焦り気味にしゃべった。

「そうですか…お泊まりはどちらに？」

「アルファリゾートトナムだよ」

「じゃあ違いますね……………ではまた!!」

な〜にがまた!!や。

もう会わへんっちゅ〜ねん!!

あたしはイライラしながら車に乗った。

空気読めない平次の話には耳も傾けず、ホテルにつくまでだんまりをした。

11. トマム

「見て、和葉ちゃん。見えてきたよ」

一番最初に声をかけてきたのは蘭ちゃん。

ぎょーさんおっきいビルが見え始めたころや…

「…ホンマやあ…」

おっきい。

タワーが2個…いや、奥に2個たつとるから全部で4個やな。

しかしホンマ山の中やわ。

自然にかこまれ過ぎといっているほど、山、山、山…

そして…

一面の銀世界。

あたしが想像してたのよりも、飛行機でみてたのよりも、もっ
っと…

白…というより、ホンマに銀みたいな…

何年ぶりかに見る…いや、今までに見たことないくらの銀世界が広がっていたんや。

「お客さんが泊まる場所はザ・タワーといって、一番手前に見えるタワーのことですよ」

「一番手前…にしてもおっきいなあ」

「そやね…」

あたしら二人は、感動しまくりやってん。

後ろの二人はかるく興味あるぐらいやけど。

蘭ちゃんもそれに気づいたらしくて、二人で思いつきにらんでやったんや。

平次と工藤くんはそれに気づいとらんけど。

「では、私が荷物はこびますので、先にフロントでチェックインしてかまいませんので」

「ありがとなッ」

「じゃあ頼みますね」

あたしと蘭ちゃんは男二人と運転手さんを残して、いそいそとバスを降りて、フロントに向かった。

まさか：

こんな事ってありなんか？

11. トマム(後書き)

パソコンで書いたから
なかなかおかしく
なりましたネ(^ | ^ ;)

かなん

12. 予約無

まさか、ここまできてこんなことが起こるなんて、少しも思わなかったんや。

「予約できてへんて…どういことやの！」

「で、ですから…遠山様というお名前で、今日から3泊4日で宿泊なさる予約は…はいつていないんですよ…」

「そんなことないです！ちゃんと調べてください！」

「はあ…しかし…ここにあるデータはしっかりと旅行会社から届いているもので…」

「そ、そんなあ…」

「蘭、どうしたんだ？」

荷物を運び終えたのか、工藤君と平次がきた。

「新一：それがね、あたしたちが今日ここに泊まる予定が入っていないみたいなの…」

「どないしょ：工藤君…」

すると、フロントの奥からひげを生やしたおっちゃんが出てきたん。

「もしかして：新一くんですか？」

：工藤君の知り合い？

「お久しぶりです、佐伯さん」

「：新一、誰？」

「ああ、この人は親父の友人で…」

「佐伯と申します。アルファリゾートの最高責任者です」

「「さ、最高責任者?!」」

そんな知り合いがおったなんで：

さすが工藤君、恐るべし：

「どうやら、旅行会社の手違いがあったみたいです。あいにくですが、一週間近くこちらのザ・タワーは空いてないんですよ…」

「そうですか…じゃあ、あきらめて帰るしかないですか？」

佐伯、となのおっちゃんは少し悩んだすえ：

「わかりました。最高の部屋をご用意します。ここのタワーではないのですが…このホテルの奥にもツインタワーがあります。ガレリア・タワー・スイートホテルというのですが…そちらを一部屋でよろしかったらご用意しますよ」

「「「え？」」「」」

な、なんて大胆な…

「佐伯さん、それは…」

ホテルマンの一人が声をあげた。

「私の招待客であれば問題ないだろう」

「…」

この人、最高責任者とあっては、なかなかのつわものなのやろか…
職員全員だんまりや。

「では、ガレリアの方には連絡しますので。そちらに向かっていた
だけですか？」

「ホンマに??」

「ありがとうございます!!」

「おおきに」

「ありがとうございます」

あたしたちは一人一人お礼を告げて、バスのほうへ歩いた。

運転手さんは会話を聞いていたみたいで、もうすでに荷物はバスの中に詰まっていたんや。

やけどホンマ…

不幸中の幸いやね。

しかも、スイートルームって…

あたし泊まったことあらへんよ；

楽しみやなッ

12. 予約無（後書き）

佐伯と言う人

実際にはいません…よね？

かなん

13. 移動先

バスに乗って5分。

ガレリア・タワーに到着。

こっちもまたでっかくて、上を見上げていたら首が痛くなってしまった。

ロビーに入ると、一人のホテルマンが出迎えた。

「遠山様ですね。話は佐伯のほうから伺っております」

「あ、どうも…」

「なんか、すいません…」

「いえ、責任があるのはこちらのほうですから、ご心配なさらないでください。チェックインはもうお済ですので、お部屋へご案内します」

てきばきと話をすませると、あたしらの荷物を持ってくれた。

少し長い廊下を歩いて、エレベーターを待っていたとき…

がばッ

「平次さ〜ん♪」

誰かが平次の腕にくっついてきた。

誰かって…もちろん…

「笑夏ちゃん？ どうしてここに？」

「それはこちらの台詞ですよ〜ザ・タワーって言ってたのに…あ、私はこの塔の32階に泊まっていますの」

「ホントに？」

「新一君たちはザ・タワーではなかったの？」

「実は、手違いがあったらしくて、向こうの部屋に泊まれなくなっただ。でも、ここの責任者の人が僕の知り合いで、こっちを案内してくれたんだ」

「そうでしたの…お部屋は何階なの？」

「お知り合いの方ですか？残念ですが、ご案内できるお部屋は33階ですね…」

「そう…」

少し眉毛が垂れた。

そんなに平次と同じ
ところがええんか？

こんな推理ヲタクの…

…あたしも人のこといえへんけどな。

エレベーターに乗り、32階と33階のボタンが点滅した。

32階で彼女は降り、あたしはちよっとほっとした気分になった。

「彼女、手ごわそうね…」

蘭ちゃんが小声で話してきた。

33階でドアが開くと、ホテルマンが部屋の前へ案内した。

「こちらです」

案内された部屋は、一番奥。

あたしははよ景色が見たかった。

ホテルマンの人がポケットから鍵を出し、ドアをあけた。

でも、目の前はまた廊下。

いったいどこまで廊下やねん。

と思いながら、歩いていると…

目の前が広がった。

「「え…」」

何…ここ…

14. 高級室

「え…コレがホテル？」

「普通の…家みたいやん…」

ホンマ、家やった。

高級マンションの一室みたいな。

綺麗で清潔すぎる部屋。

一面真っ白。

リビングは広すぎるくらいで、ソファアが三つ。

テレビはプラズマ。

「すご〜広い!!」

「見て見て和葉ちゃん!!」

蘭ちゃんが手招きしながら窓のカーテンを開けた。

「うわああ…」

窓の外には…絶景。

遠くの山まで見える。

右側にはスキー場。

左側には山。

最高の部屋や…

「こんなに素敵な部屋なんて…あたし達なんか得したね!!」

「そやね♪」

「ね、他の部屋にも行こうよ」

蘭ちゃんに手をひかれ、駆け足になる。

「ガキやん…」

平次は呆れとるみたいやけど、そんなん構わへん!!

うきうきなんやからッ

奥へ行くと、冷蔵庫と金庫、ロッカーがある部屋。
その隣はやけに広いトイレ。
さらに奥へ行くと扉が二つ。

右が全体的に窓で明るい部屋。

左が右の部屋より若干狭く暗いけどシャンデリアがある部屋。

「すごい!!」

「蘭ちゃんどっちがええ?」

「どっちでもいいよ♪」

「ほな、あたしは窓おっきいの部屋がええなあ…」

「じゃあわたし達はシャンデリアね」

「へ? 同じ部屋やないの?」

あたしは口を大きく開いた。

「当たり前じゃない☆素敵に旅に招待してくれた和葉ちゃんに、と
っておきのプレゼントよ!!」

「な…」

だからって…なんであたしと平次が…

「それに新一は服部とじゃ煩くて寝れないだろうしね。汗」

…確かに…

一晚中事件の話、ぶっとおしそ〜や…

「…そやね、そおしよ」

部屋分けはこんな感じに決まったんや。

平次は

「工藤と同じがええ」

ゆっとなったけど、気にしない。

蘭ちゃんと工藤、邪魔しちや悪いしなア。

15. お風呂

「せやけど…なんでこないに部屋ぎょさんあるのに、お風呂がな
いんやろ？」

疑問を言葉にした。

リビングに戻ったあたしと蘭ちゃんは、自分の荷物を整理したり、
飲み物を冷蔵庫にいれたり…

そんな時に、ふと思ったんや。

「そういえば…こんなに広いのにお風呂ないなんて変ね…何階かに
あるのかな？」

「お前ら、知らなかったんか？」

「平次」

平次と工藤君は、俺らは知ってるぞ、みたいな目をしとる。

「なんや平次、知つとるんか？」

「当たり前やろ。ここ風呂で有名やんけ」

「うっさいわ。じゃあ何処にあるん？お風呂」

あたしがじと目で平次を睨みつけた。

「あそこの大きい扉、開けてみなよ」

工藤が指差した先は、リビングのテレビ横にある、スライド式の扉。これがまたおっきいねん。

「ここ…？…すごい…何これ?!」

蘭ちゃんがゆっくりドアを開けたと同時にめっちゃめっちゃおっきい声だしたん。

「何なん、蘭ちゃん？」

あたしは蘭ちゃんの後ろから顔を出す。

…ホンマに？

これが風呂なん？

でかすぎやん！……！

二面窓の前に、ぎょーさんおっきい丸い風呂がドンと。

その隣には…シャワー室。

「これが部屋の風呂なん？！」

「だから言ったやんけ。全室ジャグジーで有名やって」

「「ジャグジー?!」」

ジャグジーまで付いとは…あたしも目を疑ってん。

「和葉ちゃん和葉ちゃん、サウナもあるよ!!」

蘭ちゃんが嬉しそうに手招きする。

サウナ、シャワー室、ジャグジー…

あたしら、偉い場違いなところに来てしもたみたいや…

16. 祭りや

「お風呂おっきいなあ♪蘭ちゃん、一緒に入ろうやんツ」

「いいよWこのお風呂、みんなで入っても窮屈ぢゃなさそうだね」

蘭ちゃんが含み笑いする。

すると、工藤君は冗談なんかわからんけど、

「そうするか」

とか真顔でゆーとるし。汗

みんなで入るわけないやん…平次と風呂入れるか!!

「てゆか…そろそろおなか空いたね…」

「そやな…」

「ほな、飯行くか」

「そうしよツ」

こんな豪華な部屋やもん、ご飯も豪華やろな♪

ご飯は「祭りや」というところを予約してあるみたいで、工藤君に連れられてホテルの外に出た。

「祭りや」はぎょーさんおっきいところみたいで、ホテルの外へ出て少し歩くんやって。

空は薄暗く、森の中を通る道やから、結構暗い。
あたしと蘭ちゃんは半分恐る恐る歩いた。

「新ーくまだー？」

「もうそこだよ、下を見てみ？」

坂になっている道の脇を見ると、会場見たいのが見えた。

自動ドアが開き、奥へ進む。

「階段…長ッ!!」

目の前には赤い絨毯が敷き詰められた階段。
何段あるんやろ…：そうとうな数や。

でも、その先に待っていたのは…

「「うわああ〜広〜いッ！！！！」」

めっちゃでかい宴会場みたいやった。
バイキングみたいに料理が並んでいる。
蟹、刺盛り、いくら丼、鍋、焼きそば、カレー…
いろんな匂いが一気に襲ってきた。

「いらっしやいませ。お部屋の鍵を拝見させてもよろしいですか？」

「あ、はい」

工藤君が鍵を取り出し、部屋番号を見せる。

「ありがとうございます。ご予約されてる遠山様ですね。テーブル案内しますので、こちらへどうぞ。」

そういつてその人についていく。

進んだ先は、開かれたステージの前。
いわゆる…特等席みたいや。

すると、隣の席らしきところから女の子が手を振っている。

「平次く〜んww」

あ…あの女や。

あたしの気分は一気にブルーや。

「な、なんや…ねえちゃんかいな…」

「またあえてうれしい♪あ、紹介するね、姉の美尋だよ」

「はじめまして」

妹にしては落ち着いてる美人なお姉さんやな…
…あたしには関係あらへんけど…!!

「蘭ちゃんツバイキング行こうや!!」

「ちょ、和葉ちゃん…」

無理やり蘭ちゃんの手を引っ張る。

平次なんてもう知らん!!

一通り回って席に戻り、平次と工藤君が自分の食事を取りに行った。

二人が戻ってくると、ステージでなんや人がマジックとか始めたり、お婆ちゃんたちの合唱団が歌を歌いだしたり…

で、ここの名物(?) YOSAKOIが始まったりなど、なかなか楽しめたんや。

…あたしの機嫌悪いのには変わらんけどな。

相変わらずあの女、平次を自分のテーブルに招きおって、今まで解決した事件の話やらなんやら、平次からめっちゃ聞き出してん。

平次も自分の事件の自慢話が出来て、相当へらへらしとる。

他の女に鼻の下デレーツとせえへんでよ…

そんな思いが言葉になるわけなく…

むなしい自分がおった。

16. 祭りや（後書き）

ああ…姉の存在は
一体…

かなん

17. 橋の上

祭りも終わり、食事も済み…

あたしらは部屋に戻ることにした。

平次はやっと解放されたくゆうとったけど。

あの女はまだ残るみたいで、ちょっとうれしかった。

でも、あんな積極的な子、うらやましい。

…あの子みたいに、自分の気持ちに素直になれたら…

帰りの道は登り道だったから、歩く早さがみんなゆっくりやった。

あたしはなんか、あんまりテンション上がなくて、蘭ちゃんは工藤君の隣を歩いてもらった。

二人は楽しそうに話してる。

あたしに遠慮してか、いつもみたいに手をつないだりせえへん。

堪忍や…

「和葉」

平次が声をかけてきた。

あんまりしゃべりとおないのに…

「なんや？」

なんもないように装ってみた。

「こっち来いや」

「こっちって…ちょ、平…ッ」

無理矢理手をひっぱられた。

…手首ちゃうねん、手のひらを…

細い道を少し歩いて、小さな川の端の上へついた。

「なんやねん…こんなトコつれてきて…」

冬の北海道。

気温はもちろん寒く、あまりあったかい格好をしてこなかったあたしには寒すぎる。

吐く息もいちいち白い。

「ええから、上見てみ？」

平次の言われたとおり、少し頭に？を残しつつ、上を見上げた。

綺麗で声も出えへん。

一面…星ばかりや。

森の中で電灯なんかあるわけなのに、明るい。

風の音と、自分の鼓動しか聞こえへん。

「なんで…こんなトコ知ってるねん」

「さっき、バイキングのとき話してるの聞いたねん。森の中に細い川があって、その上にある橋から見える夜空が最高やって。まあ、ホンマにここかは分からへんやったんけど、勘があたってしもうたみたいや」

平次はくしゃって笑いながら話した。

「これを、あたしに…？」

「バイキング行ってから、お前元気なかったやん。せやから…な？」

なきそうになった。

涙がすぐそこまで迫っていた。

「ありがと…めっちゃ嬉しい」

あたしはホンマに嬉しかったんや。

平次はあたしの事を見ててくれてるみたいで。

「ほな、あいつら心配するやろし、そろそろ戻るか」

「うん」

平次は歩こうとするあたしの前に右手を差し出してきた。

「夜道は危険やし、お前あぶなっかしいからな」

ぶっきらぼうやったけど、あたしは今日一番の笑みがこぼれた。

ああ…あたしはホンマに平次のこと好きなんやな…

平次の背中を見ながら、そんなことを思ったんや。

17. 橋の上（後書き）

ちよつとらぶらぶ
させてみました W

かなん

18. 気遣い

「和葉ちゃん、帰り服部君とどっか行ったでしょ♪」

「え?!」

ホテルに戻って、蘭ちゃんと一緒にお風呂入った。
ジャグジーがめっちゃめっちゃ気持ちいいねん。

「知ってるよ〜森の小道走ってるの見たんだから♪」

「…気づいてたん…」

…ばれやんけ…汗
だから、さっきからにやけとるんか…

「で? な〜にしてたの?」

「なにつて…無理矢理引っ張られて…ちっこい川にある橋の上にい
っただけやよ?」

「そこでなにしてたの?」

…尋問されとる…

「なんや、〔祭りや〕で星が綺麗に見れるポイントを耳にしたらしいねん。そいで、あたしに見せたかったみたいなん…で、帰り…手え繋いだん」

「そつかあゝよかったじゃないw」

「せやけど、深い意味ちゃうよッ？夜道は危険や、ゆうて…」

「でも、服部君にも和葉ちゃんを思う気持ちあるんじゃないw」

「え…」

平次が…あたしを…？

…まさか。

夜は大変やった。

大変て…いろんな意味でやで。

平次と同じ部屋で寝なあかんし、緊張してよく寝れんし、助けを求めに蘭ちゃんの部屋に入ろうとしたら：あかん、あたしの口からは言えへん。

ホンマ驚いたわ：

しかも、そのせいで平次の事みよーに意識しおるし：

最悪やわ：

なかなか寝れんくて、気づいたらもう5時。

外は太陽が昇り始め、部屋ん中を明るく照らす。

あたしのベットは廊下側で（ってゆーか平次が勝手に窓側にしよった）外の景色がよー見えんから、平次が寝とるベットに足をかけ、平次の体の上をまたがり、窓の外を見た。

やっぱり外は一面の銀世界やった。

山も白、木も白、地面も白、全て白やった。

今気づいたんやけど、窓際はめっちゃ寒い。

布団一枚じゃ眠れへん寒さ。

平次はそれを知っててこのベットにしたんか？

あたしを気遣って…？

んなアホな…

19. スキー

7時になって、みんな起きてきて…蘭ちゃんもあくびばっかして眠そうやった。

…そら、あんなことしたらな…

工藤君には昨日寝てない事気づかれたみたいで、

「目の下のくま、かなりやばいよ」
と言われた。

…半分あんたらのせいやけどな。

なんて、口が裂けても言えへん。

8時に朝食を食べ、部屋に戻り準備を始めた。
今日はみんなでスキーするんねん♪

銀世界でのスキー。

楽しみなんやからw

…平次とスキーなんて、何年ぶりやろ。

小学校？

覚えとらん。

「あ、すまんすまん」

「すまんて…平次いい!!!!!!!!!!!!!!」

あたしは思いっきり枕を投げつけてやった。

「今出るて……」

平次は男の着替えを見たように部屋を出ていく。

…蘭ちゃんのアホ。

平次があたしに気ィあるわけないやん……やっぱ。

あたしはこんなに意識して……

「あかん、真っ赤やん」

鏡を見てあたしは思った。

ドアの向こうで耳まで真っ赤になってる平次の事なんて、想像もせず。

「うひゃー!!」

外に出て、雪の上に一歩足を乗せる。
蘭ちゃんとあたしは興奮興奮。

「新一、今年こそボード教えてよね!」

「わくってるって」

蘭ちゃんと工藤君は、前々から約束してたボードをするらしい。

あたしと平次はスキーや。

どっちともスキーは出来る方やから、教え合いつこする必要はないねんけどね。

「じゃ、あたしは先に滑ってくる！」

「ほな、俺も」

…今平次と二人つきりになりとおないねんけど…

「じゃあ、お昼にここで」

そういつて2－2に解散した。

20. リフト

…気まずいわ…

リフトに乗ってから倍思った。

リフトは2人乗りで、密着が多い。

なんでこないに狭いねん…

あたしは一人でずかずか行かなかったことを激しく後悔した。

「和葉」

「ななな何や?!」

あかん、声が裏返ってしもうた。

「なんやねん、お前。さっきから。似合わん暗い空気背負っとって」

「な、なんでもないねん。それより、なんや…?」

「昨日寝られんやったんやって?」

「…工藤君から聞いたん？」

「おん。やっぱ、廊下側も寒かったんか？」

「や、そんなことあらへんけど…」

「ほな、なんでや？」

「…ちよつと考えごとを…」

「へー。悩みすぎでハゲんなよ？」

「なッ」

平次は大笑いしとる。

ちよつと腹立つんやけど…

よかった。

普通に会話できとるなよな、あたし。

一通り滑って、お昼のチャイムが鳴った。

待ち合わせの場所に行くと、蘭ちゃんと工藤君がおった。なんや、もう席とつといてくれたみたいで。

お昼食べ終わって今度はみんなでスキー。

やっぱ一番うまいのは工藤君や。

あたしらが

「一番うまいよね」

ゆうとったら、平次が対抗心めらめらやってん。

その後、いつの間にか雪合戦始まつとって。

面白かってん。

今日は一日楽しかったわ。

何より、あの女が現れへんかったしな。

いまさらやけど、平次は渡しとおないねん。

付き合ってるわけちゃうから、こんな事言える筋合いあらへんけど…

でも…な。

離しとおないねん。

平次と一生そばにおれる女は、あたし以外いらんねん。

そんな事思いながら、今日一日が過ぎていく。

20. リフト（後書き）

チャイムって鳴るのかしら？

21. 水着姿

その日の夜は、前の日に蘭ちゃん達が寝た部屋やった。
どこか、気まずいんやけど…
だって昨日、この部屋で蘭ちゃんと工藤君が…

きゃーーーッ！！！！！！
／／／

そんで、平次と気まずいねん。

…意識し過ぎやろか？

まあ平次は、こっちの気もしらんとさっさと寝おった。

でもやっぱり窓側やねん。

平次の優しさ…なんやろか。

流石に二日連続寝てへんから、眠さMAX。

でもドキドキ。

勘弁してや…

朝、7時。

なんとか寝れた。

お陰で朝から元氣やねんッ

朝ご飯食べて、三日間もスキーは流石に飽きるゆうて、アルファリゾート内にある室内プールに行く事になった。

丁度今日は、太陽が顔出してガンガンに照り付けとるから、雪が凍って危ない、とホテルマンがゆつつたしな。

室内プールは結構広くて、あたしの大好きな波の出るプール。

めっちゃウキウキやねん♪

「蘭ちゃんの水着、可愛えくなw」

大人っぽいピンクのラメラメビキニ。スマートな蘭ちゃんにはお似合いの水着。

「和葉ちゃんこそw」

あたしんは、白地にハイビ柄で紺のデニパン。
友達と買いに行った新品やねん♪

女の子はこうして水着の見せ合いをするんや。

「お待たせ」

「遅すぎや」

「うっさいなく！！見てみ、工藤君。蘭ちゃん勝負水着やねん♪」

「ちよっ和葉ちゃん！！／＼／＼」

蘭ちゃんは全力で否定しおる。

ホンマの事やのに。

『君がどんなに否定しても
本当だから揺るがない

”君はとても美しい”という真実

ホラ、S M O Pも言っとるで？

蘭ちゃんの真っ赤さでいくと、工藤君はなんかエロい事言ったんやろな。笑

…にしても。

こっちの探偵さんは、お世辞も言えへんのか!!

「和葉」

「え?」

いきなりで少し焦った。

もしかして…

「水着に花付いとんぞ」

やっぱりな。

わかつとるねん。

平次はあたしの水着見ても、な〜んも思わへん事くらい。

ゼブラ柄は虎ジマや〜ゆうし。

なんか、アホらし。

「もう、なんでもええ…」

「変な男に絡まれたら、すぐ呼べや」

…優しいやん。

心配しとるんか…？

…まさか、な。

22. 氷の街

お昼になって、ご飯を食べた。

ここのカレーめっちゃうまかってん♪

んで、蘭ちゃんと水おかわりしに行った矢先、ナンパされたん。

相手にしてなかったんやけど、なかなかしつこくてな。

平次と工藤君が遅い事に気付いてか、いきなり肩掴むや否や、頭突きくわしたん。

二人して、一斉に。

「せやからはよ呼べゆーたんじゃ」

平次には怒らてもうたけどな。

そんなこんなでちょっと問題になり、プールから出て、テニスする事になったんよ。

太陽が出てるとは言え、やっぱり真冬の北海道。
寒すぎやわゝ…

んでびっくりしたんは、工藤君のテニスさばき。
めっちゃめっちゃ上手いねん。

平次はアホみたいに対抗しとるけどな。
完敗やった☆

汗もいっぱい流した事やし、部屋に戻って蘭ちゃんとお風呂♪

夜ご飯はトマム亭で、魚介類のレストラン。

流石北海道。

最高の味やった♪

んで、後ろの席に座ってる人の話が聞こえて、耳を傾けてたら：

『今日の雪祭り、見に行く？』

と聞こえた。

ホテルマンの人によると、トマムでは23日から「アイスビレッジ」と言う、雪祭りが行われるんやって。

蘭ちゃんに話したら、

「行きたい」

と言うて、工藤君のOKが出たんや。

せやのに、平次は…

「あゝ俺はええわ。お前らだけで行ってこいや」

…なんや。

平次は来ないんか…

22. 氷の街（後書き）

∴久しぶりの更新（^| ^;）

なかなかネタが

浮かばないとゆゝ∴

とりあえず

ぱつと浮かんだ02作

更新します（; ^ ^ A

かなん

23. 衝撃的

ホンマ、綺麗や。

北海道の雪祭りゝゆゝたら、やっぱ綺麗や有名やけど、ここまで幻想的だとは思わへんかった。

アイスビレッジ…「氷の街」、か。

この景色、名前にふさわしゅうて怖いくらいや…

一人でその場に立ちすくむ。

平次と見たかったわ。

結局、三人で行く事になったんやけど、やっぱり二人の邪魔しとるみたいやん。

やから、

「あたし先に部屋戻つとるから、二人で楽しんで来てな」
ゆうて、走って自分たちの部屋があるタワーに向かった。

「やっぱり一人で森ん中は怖いな…」

途中で足の動きが鈍くなる。

白い息を吐き出した。

そんな時、かすかな人の声が聞こえた。

森の奥の方で良く見えんが、こうゆう時だけ目が冴える。

…平次や。

そこには17年間共にした、見慣れた幼なじみの姿があった。

にしても平次、なんでこないな所におんのやろ…？

少しずつ近寄る。

ぎゅっ

誰かが平次に抱きついた。

あれって…

え…？

笑夏っちゅゝ女やん…

え…？

何…？

二人でこんな所に…なんで？

やって平次、今頃部屋に…

なんで？

思考回路がクルクルと回る。

目の前が歪んで見えてきた。

後ずさりした瞬間、

パリ

足元に落ちとった枯れ枝を踏んでもうた。

「?!…和葉…?」

あ…

アカン、気づかれてしもた…

「和葉…?」

そのあとの二人は、どうなったかなんて知らん。

あたしは平次が怖くて逃げてしもうた。

『改めて紹介する。彼女や』
なんて、聞けるわけないやろ…

まさか、こんな所でこんな日が来るなんて思わなかった。

あたしの意識が、狂う。

23. 衝撃的（後書き）

だんだんクライマックスに
近づいて来ましたッ

かなん

24. 禁断愛（前書き）

禁断愛

24. 禁断愛

逃げるように走る…というか、その場から逃げたあたしは、部屋に戻ることなく、来た道に戻ってしもうた。

「また、ここに来てしもうた…」

目の前に広がる『氷の街』、アイスビレッジ。
吸い込まれそうな幻想的なつくり。

イルミネーション。

平次と見たかった、大好きな人と見たかった景色。

「あたし、涙脆いな…」

やっぱり、すぐそこまで迫っていた涙を抑えることなんて出来ず。
声を出すまいと、歯ぎしりたてるように泣いた。

寒さのせいで、さらに冷たくなった涙が存在を主張しているように
頬を流れる。

ここにいてもしょうがないと思い、あたしは部屋に戻ろうとした。

「和葉ちゃん…?」

蘭ちゃんの声や。

アカン、蘭ちゃんと工藤君には見られたなかったのに…

「…俺、先戻ってるから」

工藤君は何かを察したみたいで、席をはずしてくれた。

「ありがと、新一。…和葉ちゃん、どおしたの…?」

蘭ちゃんに今見てきたことを…涙の理由を話した。

時間が経ったとは言え、話すのはやっぱりつらかった。
ココロの奥底では、やっぱり認めたくないという思いがあつて。

平次のこと好きなんがつらくなってくる。

これだけのことなのに…

「はい、和葉ちゃん」

蘭ちゃんは自販でホットコーヒーを買ってきてくれた。

「ありがとう…」

このころには、声を出すのもつらいくらい、体が冷え切ってしまうた。

「大丈夫だよ、和葉ちゃん。服部君はそんな簡単に、彼女作るなんて思えないし…服部君は、和葉ちゃんのことが好きなんだよ？…私は、そう言い切れるよ…」

「…ありがと、蘭ちゃん。でもな…もおええねん。平次が誰と付き合おうと…あたしは所詮、平次のお姉さん役。姉弟は恋に落ちたらアカンから…」

「和葉ちゃん…」

きつと、蘭ちゃんももう言う言葉があらへんのやな。
お互い、一言も喋らなくなった。

「和葉ア！」

なんとも間の悪い…

なんで平次がここに来んねん。

「ごめん、和葉ちゃん…ついて来ちゃって…」

うそやろ、工藤君。

ホンマはあたしが泣いてるゆゑで、平次になんかしたか聞きに行つたんやろ？

「和葉…何泣いどんねん…」

「平次が彼女出来て、うれしくて泣いてんねん！」

うそや…

「こんなトコにおらんと、さっさと彼女んトコ行き！」

「和葉…ちやうねん、あの姉ちゃんは…」

「もう、やめ…」

それ以上聞きたないねん。

「もう、ええから…言わん…とい…て……………」

アカン。

限
界

無我夢中に走りだす。

平次のおらんトコ目掛けて。

25. 指先に（前書き）

しばらくさぼってました（^^；
久しぶりなので
文が可笑しくなってます…

かなん

25. 指先に

「和葉！ちょ、待ちィや！」

「嫌や…!!」

追いかけてくる平次。
逃げるあたし。

立ち止まったら最後、17年間の想いが終わる。

今はまだ…平次の顔、見たくない…

フロントの前でもお構いなしに走る。
ロビーにいた人みんな、不思議な目であたしらを追う。

あたしは止まらず、たまたま開いてたエレベーターに乗り込む。
後ろを振り向かず、すぐドアを閉めた。
閉まっているのに関わらず、「閉じる」のボタンを連打し、自分らが泊まってる階のボタンを押した。

エレベーターがガコンと動く。

あたしは肩をなでおろして安心した。

ドアが開いた。

エレベーターを降り、ゆっくりと奥の方へ進む。

ふと、エレベーターの表示を見た。

隣のエレベーターが動いとる…!!!

まだ21階だったが、どこにも寄り道せず上がっている。

平次や…!!

平次が隣のエレベーター使ってる…

それを察した瞬間、あたしはまた走りだした。

ドアが開く音と同時に、足音がやかましく廊下に鳴り響く。

自分らが泊まってる部屋のドアが見える。

ポケットに手をつっこみ、部屋に戻る、と蘭ちゃんに言った時に渡された鍵を探す。

冷たい指先にさらに凍りつくような感覚がした。

それをポケットから出した頃には、ドアは目の前にあった。

急いで鍵を開け、ドアを引き、音をたてて閉めた。

26. 逃げず

まともに息が出来ないくらい、久しぶりに全速力で走り抜けたあたしは、ドアに背をつけて、崩れるように腰を下ろす。
安心感が滲むような体は、やっと呼吸を整えられるようになった。

逃げる事が出来た…

でも一生逃げ続けるんか？

一生こんな想いで平次から逃げないとあかんの…？

いつの間にか、涙は止まっていた。

ドンドンドンドン

「和葉ア!!」

背中から振動と、平次の声が響いてきた。

「頼むから開けろや…ちゃんと話すから…っ」

話したって…もう今更やん。

逃げる事しかできないねん。

もう、遅いわ…

でも

でも

平次から逃げて

どうなるん？

一生避けて

逃げ続けて

なんになる？

一生現実受け止めず

一生逃げ続けるんか？

平次から

みんなから

世界から…

「逃げるな、和葉…」

逃げたない

つらいけど

受け止めなあかん

逃げてばっかじゃ

この想いも

なにもかも

否定になってしまふ…

あたし…逃げへん

平次から逃げへんよ…

決心をし、鍵を開ける。

ゆっくりと、少しずつ、ドアが開く。

平次の顔がすぐそこにあった。

汗まみれ。

あたしを追いかけて来てくれた証拠。

嬉しさ半分。

現実半分。

現実がどんなに辛くても。

逃げてばかりは嫌や…!!

26. 逃げず(後書き)

評価お願いしますッ

かなん

27. 信じる

平次を部屋にいれる。

ドアを閉め、平次はリビングのソファに腰を下ろした。
あたしは汗だくの顔を拭く、タオルを渡す。

平次は

「サンキュ」

と微笑んだ。

あたしはさっきから顔をあげない。

あげないんじゃない、あげられないんや。

平次の顔、まともに見れへんから…

あたしは言葉が出て来ない。

二人きりの空間がのせいか、息詰まってしまう。

平次もこの空気が気まずいみたいで、未だ話を始めない。

長い沈黙があたし達を包む。

この沈黙が切れたのは、随分経ってからやった。

「和葉」

平次があたしを呼ぶ。

一瞬びくつとして体を固まらせたが、ゆっくり平次の方へ顔を上げ

た。

「…何…や？」

心にもない冷酷な声が出てしまう。

まだ、怖い…

「あの姉ちゃんとは、別になんもないんや」

…よかった。

ホンマになんもないんか…

嬉しさの安心と同時に、不安も込み上げてくる。

疑いたくないねんけど…

…ホンマは隠すつもりなのかも、と…

「せやかて平次、結構仲良おしてたやん…あたしから見たら、普通にまとわりつかれて嬉しいように見えたんやけど」

「別に嬉しいわけちゃうわ」

「ほな、「祭りや」行った時の嬉しそうな顔はなんやったん？」

「それはなあ…工藤がお前の前で俺に事件の話すんな、ゆるたからや。和葉の機嫌が悪うなるとな」

工藤君…

「やからバスの後事件の話出来なくて、つまんなったときに、あの姉ちゃんが話聞きたいゆゝから、話しとったらちよいええ気分にな

ったんやで」

なんや…そうやったからなんか…

「せやけど…」

まだまだ質問が出てくるあたし。

醜いなあ…

「なんで部屋にいるゆゝたのに、あそこにおったん？」

「あれはなあ…正直俺もあの姉ちゃん一人やと思わんかったんや。あいつの姉ちゃん…美尋さん？…が記者やって、俺の話聞いて雑誌載せたいゆゝから、あの場所におったんやで。そしたらあの姉ちゃんが一人でおって…まあ最初っからあそこで話聞きたいゆゝんがおかしい思っただんやけど」

平次は深いため息をつく。

「ほな、あたしらに部屋にいるゆゝたんは？」

「…お前に知られたなかった」

…あたし？

あたしに知られたなかったって…

あたしの事気遣ったから…？

28. まさか

「なんで…あたしに知られたなかったん？」

「当たり前やろ。他の女に会いに行く…ゆ…たら、お前めっちゃ拗ねるやんか」

「平次…」

あたしの事、ホンマに気遣ってくれたんか…？

嬉しい…

嬉しい、嬉しい…!!

いつの間にか止まっていた涙が、音をたて始める。

ポタポタ、と。

「なっなんでなくんや!？」

「やってえ〜…」

声にも出ないこの想い。

上手く説明出来るやろうか。

「なんや…嬉しいんやもん…」

「やからって…そないに泣くこと…」

「やって…あたし、平次の事好きやから…」

「「え？」」

ちよ、待って…

あたし今なんて…

嬉しくて、涙出てきて…

平次になんで泣く？言われて…

で、あたし何て答えたんやっけ…

なんで、目の前におる平次が、顔真っ赤にしとるんや？

あたしは…

『平次の事好きやから…』

好き…

好きや…

好きやから…

平次に…

告白…した？

28. まさか（後書き）

いよいよクライマックスです！

あと05話くらいで

終わるかと…

かなん

29. あなた

我に返って、自分の放った言葉に後悔する。

『平次の事好き』

その言葉が頭の中をしぶとくりピートし、目眩が起こる。

まさか。

こんなタイミングで言うつもりなかったのに……!!

いくら冗談や、と言ったところで、今まで通りの関係に戻るのは無理な気がする。

でも、あたしが言った事を口実に、平次があたしの事どう思ってるか、聞けるんじゃないか。

いつもいつも、思わせぶりな態度で、あたしを悩ませてきた平次。

もしかしたら絶好のチャンスなのかも…？

やけど。

『どうとも思わへん、ただの幼なじみや』て言われたら、あたしどう生きて行けばええんやろ…

怖い。

「和葉…オレン事好きなんか…？」

「え…」

…今更なんなんッ

怖い。
怖いけど。

今こそ、今までの想いを聞いて貰えるチャンス。

もう伝える事も許されないと思った言葉を、声に出して伝えられる
チャンス。

さっき逃げないって決めた。

あたしはもう逃げたない。

逃げへん…!!

「そ、や……あたし……ずっと……平……次の事……が、好き……やってん……」

先程告白してしもた時に止んだ涙。
今は言葉を発する事に邪魔する。

「ずっと…ずっと…平次だけ…を、思って…生き…て来たん…よ…
」?

「和葉…」

あれ…？

ここどこ？

一瞬で目の前

真っ暗になった

でも

真っ暗なのに

あったかい

そうや

あたし

ずっと

ずっと

この温かさを

待ってたんや

この温かくを

独り占めしたくて

今まで

平次の事

思ってたんや

って事は…

この温かさって…

顔を上げた。

平次の顔があった。

そっかあ…

あたし、平次に肩抱き寄せられて…

目の前が真っ暗だったのは。

平次の胸の中におったからやったんやね。

「アホ、なんちゅー事言うねん」

ア、アホ？

「オレより先に言いやがってからに」

オレより先？

「よ才聞いとけよ…」

：

「オレも…和葉の事好きや」

30. 始まり

やつと…

やつと通じ合えたんやね。

お互いがお互いを好きだと思う気持ちを。

目が覚めたら、すぐ天井が見えた。

でもすぐ、視界の全てを他のモノに取られる。

平次の顔。

目の前に、平次のか…お……

.....

あたしは声もあげずに起き上がる。

ごちん
ツ

オデコとアゴがぶつかった。

あたしは起き上がった体で、オデコをおさえる。
平次も、同じようにアゴをおさえてた。

どうやら、先程まであたしが寝ていたのは、平次の膝の上みたいや。

「なんやねん！お前…いきなりぶっ倒れたと思うたら、頭突きしおつて！！」

そうか…

平次の気持ち聞いた後、嬉しさのあまり、失神したみたいや…

なんてアホな…！！

「ごめんて…悪気ちゃうもん…」

あたしは頭を下げて謝った。

まだ、平次とぶつかったオデコが熱い…

平次がため息混じりに話す。

「…別にええけど。ちゃんとオレの話、聞いたったか？」

「あ…」

顔が熱くなる。

平次は、顔が真っ赤になったのを見て

「聞いたったか」

と言う。

「まあ失神された時は、折角の告白を台無しにされたと思うんだけどな」

ニカッと苦笑する平次。

真っ赤になってうつむくあたし。

「和葉サン、オレと付き合ってください」

今までには感じる事の出来なかった二人の空間。

少し不思議な気もするけど、なんだか嬉しい…

「ほら、はよ返事せんかい」

「……はい……」

こうして、あたし達は17年間と言う長い年月を経て、
「幼なじみ」の関係は幕を閉じた。

そして、今この瞬間、
「恋人」と言う新たな関係がスタートした。

30. 始まり（後書き）

めでたしめでたし…ッて
まだ続きますヨ？わら

かなん

31. 嘩然と

平次の告白に返事したあと、タイミングを見計らうかのように、部屋のチャイムが鳴る。

急いでドアへ向う。

「ただいま」

「お、おかえりッ」

蘭ちゃんと工藤君が帰ってきた。

工藤君が鍵をかけ、そそくさと歩く。

「…和葉ちゃん？顔真っ赤だよ？」

「そ、そんな事あらへんよ?!」

声が裏返ってしもうた。

二人はお互いに目を合わせ、頭に?
を浮かばせてる。

でも、その？もすぐ、！へと変わった。

何事もなかったように座っている平次を見たから。

蘭ちゃんがあたしの腕をひっぱり、平次に背を向ける。
右に蘭ちゃん、左に工藤君が。

「どうしたの?! さっきまであんなんだったのに…」

「仲直りしたんねん…」

二人わ

「そっか」

と言わんばかりに首を縦にふる。

「でも、なんで和葉ちゃんが顔真っ赤になってんだ?」

工藤君は勘が鋭い。

言っただ方がいいのかな…

「あたし…勢いで平次に好きや言ってしまったんねん…」

「ホントに?！」

「やったね☆」

次々と声上がる。

もちろん、平次に聞こえないような小声で。

「で、どうだったの？」

「へ…平次も、あたしの事好きで…」

一息おく。

「付き合ってくださいって…」

あれ…

なんで二人とも沈黙？

なかなか声が出ない二人。

顔を見ると哑然と口を開いたまま。

まるで二人だけ時間が止まったみたい。

32. 笑い声

「あの…」

あたしの声で、やっと二人が我にかえる。

「服部が…?」

「付き合ってくださいって…?」

「うん…」

「そんなにおかしい…?」

「そりゃそうだよ!! まさか服部が…なあ、蘭」

「うん…言うと思わなくて…」

確かに、平次がそんな台詞言わないかもしれない…
ってゆうかみんなには想像出来へんかもしれへん。
あたしも…正直びっくりしたし。

でもな…

あたしちゃんと聞いたねん。

この耳で。

あの声を。

あの台詞を…

「何コソコソしとんねん…」

平次がぶっきらぼうに話しかけてくる。

蘭ちゃんは動揺を隠せず、工藤君は笑いをこらえてる。

あたしもなんか面白ろなってきたわ。

「和葉ちゃん、和葉ちゃん」

「なんや？ 蘭ちゃん」

「これからはWデートだねW」

Wデート…

「そやねッ」

あたしと蘭ちゃんは、平次に聞こえないように、クスクス笑った。

デート…

してみたかった事。

やっと、あたし達も二人で歩いてる事を、デートだっていえるようになるんやね…

なんか…ドキドキしてきた（^^）；

時間わいつのまにか11時を過ぎていて、あたし達は帰る支度を済まし、寝室へ向かう。

あたしと平次は、同じ寝室。

今日も寝れなさそうや…

32. 笑い声（後書き）

サボりMAX…（^^；
お待たせしましたッ
あと05話くらい…とか
嘘になります（涙）

33. ベット

「…なア」

いきなり話かけられて、びっくりしたのはあたしの方。

「な、何や…？」

あたしわ声が裏切りそうになる。

「そっち、寒ないか？」

「う…ん…ちよつとな」

「…こっち来るか？」

「…へ…？」

それって…

ある意味お誘いやん!!!!!!

…あかん、あかん。
変な方に妄想が…汗

…別に深い意味あるとちゃうよね…？

あたしらは、背を向けて横になってる。

平次の顔が間近にでもあったりしたら…

あたしはドキドキに勝てへんよ…

長い沈黙

冷たい空気

でも

あたしの背中

あたかい…

平次の

ぬくもり…?

もっと触りたい

もっと近くに…

平次

平次…

「和葉」

「は、はイー?!」

びっくりした。

平次の事ばっか考えてたら、本人に呼ばれたんやから…

「ホンマ今日お前変やで」

「…平次はなんで普通なん？」

「はい？」

「へ…平次は…あたしと付き合おたの…そんなにいつもと変わらん事なん？」

急に押し寄せる不安。
言葉にするのも怖い…

「そんな事…ないで」

「ホンマに…?」

「…当たり前やん。何処の世界に今までずーっと好きやったやつと付き合えて、普通にされてられるやつがおるん」

あたしは平次を指さす。

「あんなく…」

平次は一息おく。

「よっしゃ、ゆうたるわ。俺めっちゃ緊張しとる。やけどお前の前で見栄はってるだけや。かつこ悪くトコ見せとおないし。俺、工藤みたいに素直なやつやないしな。」

平次の顔全体が真っ赤になった。
見なくてもわかる。

あたしは急に笑いが込み上げてきた。

33. ベット（後書き）

なんとか書けました：

軽くネタ詰まり中です（^^；

しかも長々と：

これからの話は

クライマックスのその後：

ということにしましょう笑

かなん

34. 頬キス

「な…何笑つとんねん!!」

「だってえ…あははっ」

も…とまらん!!

あたしは笑いのドツボにはまってしもうた。

だって…

あの負けず嫌いで意地っ張りな平次が…

「平次が…めっちゃかつこ悪いんやもん!!」

「な…ッ」

平次が体を起こしてあたしの顔を覗き込む。

怒った顔をしながら。

まだ…顔を赤らめながら。

「か…堪忍ッ」

あたしは笑いながら謝る。

笑いをやめて、息を整えた。

「でも…平次の本音聞けてよかったわ。なんか…めっちゃ嬉しいし…」

「…ぼけ」

「和葉」

「ん？何？」

ちゅ

平次はあたしの頬にキスをした。

「へ…いじ…？」

「笑った罰や…あほ」

すぐ顔をそむけたけど、横顔でわかる。

優しく微笑んだ平次の顔。

まだ赤らめてるであろう顔を隠してるのだろうか。

真っ赤に染まった耳たぶ、隠せてへんよ。

愛しくて、たまらない。

その仕草。

好きやで、めっちゃ。

めっちゃうちゃ好きやねん…

言葉にするより遙か先に、平次の頬にキスをする。

見ないで、と言わんばかりに、布団の中へ逃げ込むあたし。
…恥ずかしいねん。

平次の顔は見れへんけど、布団の中で背を向けてるあたしの後ろから、ゆっくり手を回してきた平次はきつと、嬉しそうな顔してるに違いない。

…そう願って平次のぬくもりを再確認しながら、ふたりで眠りについた。

34. 頬キス（後書き）

…さぼりまくってました（^^；
楽しみにしてくださった方々
申し訳なさすぎでース（^Д^）

かなん

35. ドレス

目が覚めたと同時に、昨日背中から感じていたぬくもりがない事に気付く。

隣にいるはずの平次の姿がない。

（平次…？）

部屋を見渡す。

しかしいない彼の姿があるわけなくて。

急に不安の波が押し寄せてきた。

…昨日の事は、全て夢だったのではないか…

泣きそうになった。

がちや

ドアが開く音にびくりとする。

平次…？

「あ、起きたあ？」

朝から元気な透き通った声の主は、蘭ちゃんやった。

「昨日寝るのおそかったみたいだね」

「え…うん…」

平次じゃない事に少し肩を落としてしもうた。
蘭ちゃん堪忍や…

「じゃあ、主役も目覚めた事だし、支度始めなきやw」

「し、支度？…て、なんの…ひゃあ！！」

いきなり、蘭ちゃんがあたしの服を脱がしはじめた。

…蘭ちゃん…そんな趣味が…？

ちゃ、ちゃう。

なんで脱がされてんねん！
寝起きやからあんま抵抗できひん…

成されるがままに服を脱がされ…

「じゃあ、これに着替えてw」

嬉しそうな顔をして、あたしにそれを見せてきた蘭ちゃん。

真っ白で…

ひらひらしとる…

これは…

ドレス…？

しかもただのドレスやない…

どっかで見たことある…

ウェディングドレス…？

わけのわからないままウエディングドレスを着させはじめる蘭ちゃん。

聞いても聞いても、答えは
「あとでわかるよw」
の一点張り。

なんで…あたしがウエディングドレス着るのか…？

かすかな期待をした。

36. あたし

「和葉ちゃん似合いすぎw」

蘭ちゃんのピンクの声に、やっと我に返る。

部屋に置いてあるドレッサーの大きな鏡を見た。

真っ白なドレス。
包まれてるあたし。

「なあ…蘭ちゃん。一体何を…」

「まだだゝめッ次はお化粧ねw」

蘭ちゃんの声と同時に、ドアが勢いよく開いた。
そこに立ってる数人の女の人たち。

「蘭ちゃん…この人たち誰なん…？」

「えっとね」

蘭ちゃんの答えを聞く暇もなく、その人たちが襲いかかってきた。

…正確には、囲まれた。

01人の女の人化粧を始め、もう01人の人が髪の毛をとかす。
他の人はネイルしたり、靴のサイズを合わせたり、蘭ちゃんとか
予定を話し合っていたり…

なんか、ホンマにお嫁さんみたいや…

全て終わり、鏡の中の自分に呆気取られた。

「ぱっちりW和葉ちゃん可愛いW」

蘭ちゃんは満足そうに見てる。

「でも…なんでこないな格好、しなあかんねん…？」

「今から行くところに着けばわかるよ」

蘭ちゃんが優しい目で微笑んだ。

今から行くところ…？

蘭ちゃんに手をひかれ、ウェディングドレスのまま部屋を出て、エレベーターに乗り、フロントに鍵を預ける。

途中ロビーにいた宿泊客の人に、不思議な目で見られて、正直恥ずかしかった。

ホテルの前に止めてあったタクシーに乗り、坂をくだり、すぐ止まった。

目の前の建物は…

氷の…教会…？

37. 後ろ姿（前書き）

長らくお待たせしましたッ
ラストまで書きますW

かなん

37. 後ろ姿

雪はもう止んでるけど、やっぱり外は寒い。

北海道だから、という理由もあるけど、多分01番はこの格好のせい。

身にまとっているウェディング：

雪が似合う、真っ白な真っ白なウェディングドレス：

蘭ちゃんに手をひかれ、成されるがままに連れて来られた。

ここは、氷の教会。

蘭ちゃんところに泊まる計画をたててる途中に、ちらッと放たれた一言。

『氷の教会っていうのがあるみたい』

あんまり気にとめてなかったけど、時間があるなら行きたいと思ってた。

まさかウェディングドレスで行く事になるとは思ってなかったけど。

静かな教会に、バージンロードみたいな赤い絨毯。

あたしは吸いこまれるようにその上を歩く。

目の前に、見慣れた後ろ姿。

あたしの恋しい姿。

あたしの…

愛しい…

「和葉」

振り向いた彼。

その声だけでドキッとする。

「はよ、こっち来い」

彼の言葉にひかれる。

「なんや、結構似合っとなるやないけ」

平次は照れたように笑った。

隣で歩いてた蘭ちゃんは、いつのまにか最前列にいた工藤くんの隣に座っとる。

「孫にも衣装とは、このことやな」

いつものからかい口調。
でも、どこか新鮮で：

ドキドキが高なりすぎて、声も出ない。

38. 結婚式

「平次、これは一体…?」

やっと開いた口。

疑問を言ってみたけれど…

「まあまあ、ほな続けてくれや。佐伯さん…やなかった牧師さん?」

牧師の格好をしているのは、ここの最高責任者でもある佐伯さん。

佐伯さんまで…なんつゝ事を…

「では式を続けます。新郎服部平次。あなたは、苦しい時も病める時も、遠山和葉を愛する事を誓いますか?」

なんか：

ホンマの結婚式みたいやわあ：

ッて呆気にとられてる場合やない。

ホンマに愛の誓いをしとるやないか！！

恐る恐る、平次を見上げる。

平次は、めっちゃ凛々しい顔をして、それでも少し艶っぽい声で：

「誓います」

その瞬間、身体の体温が一気にあがったのがわかった。
そして、あたしの顔も真っ赤になった事も。

「へい…じ…」

声が今にも涙で押し潰されそうになる。

平次はあたしの顔をみて、もしかしたら初めて見たかもしれない笑顔を見せた。

そして、あたしから視線をそらし…

「こうゆうこっちや」

後ろにいる人に、言い聞かせるように言った。

ゆっくり振り向いてみれば、そこには彼女、笑夏さん。
悔しそうな、泣きそうな顔をしてあたし達を睨みつける。

そして何も言わずに走っていった。

これが、あたし達が見た彼女の最後の姿やった…

39. ちかい

「平次…」

「可哀想とか思ったらあかん。これが俺が決めた道なんやから。嬉しがれや」

「そうやね。」

彼女には悪いけど、あたし今、めっちゃ嬉しいんやから…

「でも予定わ狂ったんやで」

「予定？」

「そうや。最初っからここ泊まる決まった時からずっと決めてたんやから。ここでお前に告白する、ってな」

まさか。

ずっと決めてたなんて…

「しかしぜーんぶめちゃくちゃや。お前が先にゆーから…」

「い、ごめん…」

なんかめっちゃくちゃ悪い気がしてきた。

でも、平次はあたしの頭をポンッと叩くと

「一生に一回きりの告白なんやから、かっこよくキメさせろや」

と、小声で言った。

目をそらし、もちろん耳まで真っ赤な顔を隠しながら。

愛しい…

平次…

好きやで…

ゴホン、と軽く咳払いし、いいところすいませんみたいなオーラの牧師さんこと、佐伯さん。

平次は少し焦りながら

「続きしよか」
と言った。

『お前の返事も聞きたいし』

付けたされた台詞。

「では。新婦、遠山和葉。あなたは苦しい時も病める時も、新郎服部平次を愛する事を誓いますか？」

今なら言える

素直な気持ちを

「…誓います」

少しでも平次の真似を試してみた。

凛々しく、後悔はしないって、気持ちを伝えるために。

横目で見た平次は、幸せそうやった。

「では、誓いのキスを」

見つめ合う瞳と瞳。

重なり合う手と手。

繋がってく心と心。

もうこの瞳をそらさない。

もうこの手を離さない。

もうこの気持ちを隠さない。

絶対に見失わない。

絶対に見失わせない。

あたししか愛さないように。

平次しか愛さないように。

そう、心に決めて。

愛を誓って――：

39. ちかい (後書き)

結婚式編終了 (● ^ O ^ ●)
次で最終話：

かなん

40. 来年も

空港でお土産を買うあたしと蘭ちゃん。

いつもと変わらいけど、自然とニヤけてしまうあたしに、蘭ちゃん
わ一回一回反応してる。

あんまりからかわんといてーって言っても無理なわけで。
蘭ちゃんのウキウキは止まらないわけで。

かなり恥ずかしい。

でも。

後悔はしとらんよ。

やっと平次に想いが伝わったんやから。
ニヤニヤしてしまう。

お土産も済み、搭乗時刻。

あたしと平次は大阪方面の飛行機に乗るから、工藤ちゃんと蘭ちゃん
とここでバイバイ。

次に会う約束をして、互いの姿が見えなくなるまで手をふった。

やっぱり、少し気まずい。

隣の席に座ってるのに、沈黙になってしまった。

でも、今度はあたしから。

「平次」

「ん？」

「手え繋いでもええ？」

びっくりした顔。

でもその顔は一瞬でニヤけ顔に変わる。

「そやな、でもお前のお願ひ聞いてやる代わりに、俺のお願ひも聞けや」

ニヤけ顔が少し怖い（＾＾；

「ん…なんや？」

あたしの右手に平次の左手が重なる。

それと同時に、頬にキス。

いきなりで呆気にとられた。

でも、嬉しくて。

幸せで。

指先を絡めながら、『来年も来ようね』と約束をした。

E
N
D
.
.
.

40. 来年も(後書き)

長々とお付き合いいただき
ありがとうございましたw
そして放置時間やたら長く
申し訳ありません：(＜|＞)

『…冬物語…』

楽しんでいただけただ
しょうか？

初めての小説&長編だったので
不可解な点もたくさんで：
誤字脱字ばっかですね(^^；

切なめで書いてたのに
後半ラブラブモード：

結局ラブモノです(*|*)
ラブラブな02人が

好きなんですけどね(o・v・o)

評価もたくさんいただき
ありがとうございますw
たくさん学びました(o^_^o)

次回作も長編に挑戦：(^^；
途中で息抜きに短編を
書くと思いますが(わら
100%パラレルでいきます！！
初☆パラレルです！！

ちなみに…姫と家来の
危ない恋…？（^| ^A

平和以外のカップルは
期待しないでください…

新一が一番

大変な人物になります（—|—；
快斗出て来ますよ☆ミ

では、長くなりましたが

読んでくださった方々

深々と感謝いたしますW

次回作もよろしく

お願いしまーす（O・V・O）

かなん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772b/>

…冬物語…

2010年10月8日12時17分発行